

信州大学大学史資料センター企画展 「明治・大正期 信濃博物学の夜明けと長野県師範学校 ―矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に―」実施報告

坂 元 英 恵 (大学史資料センター)

田 中 圭 美 (大学史資料センター)

はじめに

信州大学大学史資料センター（以下、「大学史資料センター」）では、2022（令和4）年10月28日（金）から12月27日（火）まで、信州大学附属図書館中央図書館（以下、「中央図書館」）の展示コーナーにおいて、第5回企画展「明治・大正期 信濃博物学の夜明けと長野県師範学校 ―矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に―」（以下、「当展」）を開催した。当展は、信州大学の前身校のひとつである長野県松本女子師範学校（以下、「松本女子師範学校」）の初代校長 矢澤米三郎（1868―1942）の足跡と研究を振り返り、また矢澤が松本女子師範学校に寄贈し、信州大学自然科学館（以下、「自然科学館」）に継承された数々の標本を展示において取り上げ、改めてその歴史をたどることを目的として企画した。



写真1 展示全景

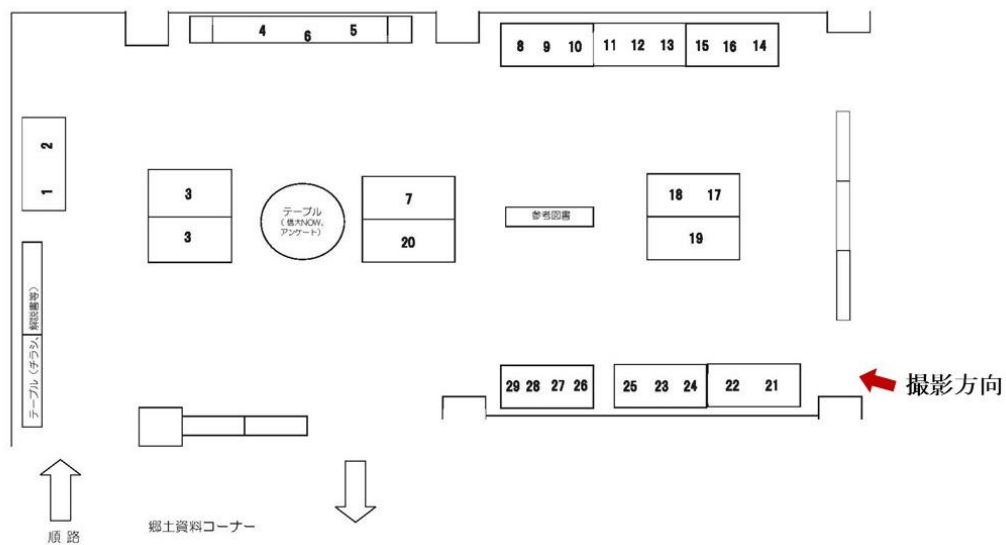


図1 展示レイアウト

1. 展示概要

大学史資料センターは2018年より企画展を毎年開催してきた。初回から第3回までの展示は信州大学全体の歴史に関する内容を扱ったが、2021年の第4回企画展「SUNS—人をつなぐ・キャンパスをつなぐ—」¹⁾²⁾では初めて大学全体の歴史以外のテーマを掲げて開催した。第5回企画展においてもこの方向性を引き継ぎ、自然科学館で所蔵しているニホンライチョウ標本、高山植物標本には信州大学の前身校のひとつである松本女子師範学校から引き継がれたものがあることを再認識するとともに、ライチョウ・高山植物研究の第一人者としての矢澤米三郎の実績の再評価を試みた。そのために自然科学館に協力を依頼し、人文科学的な展示を得意としてきた大学史資料センターに自然科学的観点も加わった「文理融合型」の展示を目指し、当展を開催した。

2. 展示準備

当展の展示構想がなされたのは2021年11月であった。そこから1年をかけて資料の調査や展示内容構築を行い、2022年度に展示する資料を準備し、企画展開催となった。

当展の開催に向け、信州大学に現存する矢澤米三郎に関する資料の調査と確認を行った。矢澤は長野県尋常師範学校を卒業、東京高等師範学校に進学し、研究科を修了した後は母校長野県師範学校教諭に任命された。その後松本女子師範学校の初代校長となり、松本高等学校で自然科学講師（2年目以降は「自然科学（生物）」）を担当、同校山岳部初代部長も務めている。現在の諏訪市出身で、晩年は療養のため神奈川県逗子町（現 逗子市）で過ごしたが、墓地は現在の諏訪

市に建てられた。こうした経歴から生地の諏訪市周辺に矢澤に所縁の資料がある可能性を考えた大学史資料センター・福島正樹特任教授が諏訪市博物館に問い合わせたところ、同館が矢澤家から預かっている（2022年8月に所有者から寄贈された）資料のなかに米三郎関連資料も含まれていることが判明したため、資料の確認と調査を行った。これまで大学史資料センターは信州大学所蔵の資料をもとに企画展を行ってきたが、本学以外の資料を借用しての調査、展示は今回が初めてであった。

2-1. 矢澤米三郎資料（諏訪市博物館所蔵）

矢澤家資料の調査は諏訪市博物館にて行った。諏訪市博物館では『矢澤家資料目録』が作成されており、矢澤米三郎の関連資料も目録化されている。矢澤家関連の資料には高島藩の山目付の職にあった時代の文書や家系図など、江戸時代の資料が多く残されている。調査の際、矢澤米三郎の関連資料に、ノートや写真アルバムなどに加えて1921～1925（大正10～14）年に書かれた本人の手記11冊を発見したが、日記は現時点で見いだしていない。

『矢澤家資料目録』は通番号と登録番号を振り分けることで矢澤米三郎、矢澤家関連の資料の整理が行われている。展示の準備と活用を目的に、『矢澤家資料目録』を大学史資料センターにて共有することの了承を得て、紙ベースの手書き一覧と電子データの目録を借用した。

諏訪市博物館で矢澤の手記を発見したことは信大NOW135号³⁾「信州大学自然科学特集」に掲載され、『矢澤ノート』として紹介されたので参照願いたい。2022年10月28日（金）発行の信濃毎日新聞の23面、11月5日（土）発行の毎日新聞の21面にも、矢澤の手記発見と本展開催に関する記事が掲載された。

2-2. 『郷土研究資料目録』（中央図書館所蔵）

『郷土研究資料目録』は、1936（昭和11）年3月に松本女子師範学校が発行した郷土研究用の参考書籍と標本類に関する目録である。初代校長を務めた矢澤が採集した資料に関する記述があると考え、内容を確認した。目録のなかに動物標本として「らいてう」の項目があり、雌雄・捕獲年月日の情報が記載されている。自然科学館所蔵のライチョウ標本との同定作業を行うことができ、それらが本目録掲載の標本であることがわかった（2-3参照）。なお、矢澤は数多くの高山植物も採集しているが、植物標本の目録は収録されていない。

2-3. 標本資料（自然科学館所蔵）

2021年11月に2022年度に行う第5回企画展の検討を行った際、前月10月に中央図書館新館長および大学史料センター新センター長に就任した東城幸治教授（理学部、山岳科学研究拠点）より、自然科学館の標本の遺伝子解析が終了したこと、見栄えのする標本が多いことからそれらの展示の発案がなされた。そこで矢澤米三郎の履歴について調査し、標本と共に展示することを計画した。理学部では松本市立中央図書館でライチョウ研究についてのサテライト展示を行った実績もあり、企画展の協力を依頼することとした。

また、自然科学館で標本を見る場合、自然科学の観点からとなることが多い。貴重な標本を多く残した矢澤米三郎について深く掘り下げ、人文科学の観点から見つめ直すことで、改めて標本に新たな価値を付加することも可能となると考えた。

2022年4月に大学史資料センターの教職員が自然科学館を訪れ、実物のライチョウ標本の調査を行った。ライチョウ標本はガラスケース内に捕獲された月ごとに雌雄の対で陳列されている。それぞれの標本をガラスケースから取り出し、4方向（正面・背面・右側面・左側面）から撮影した。加えて標本の台座の裏面の撮影も行った。台座には複数の手書きの文字とラベルが貼られていた。なかには「女師（女子師範）」の焼印や松本女子師範学校と書かれているラベルもあった。これまで、自然科学館のライチョウ標本は、松本女子師範学校から自然科学館に受け継がれていることが知られていたが⁴⁾⁵⁾、『郷土研究資料目録』との照合はされていなかった。そこで、同目録の「らいてう」一覧に仮番号（1～20）を付け、標本の台座から読み取れた情報を参考に、笠原里恵助教（理学部、山岳科学研究拠点）作成の標本リストとの照合を試みることにした。巻末の「自然科学館ライチョウ標本一覧」を参照願いたい。

自然科学館のライチョウ標本リストの項目（性別・標本採取日）と『郷土研究資料目録』の記載（雌雄・捕獲年月日）を突き合せた結果、自然科学館のライチョウ標本が『郷土研究資料目録』に記載されている標本と一致することがわかった。今回の調査では、標本の台座の手書き文字やラベルなどを可能な限り読み取ることができたので、今後の詳しい調査で、ライチョウ標本が受け継がれてきた詳細な経緯などがわかる可能性がある。継続的な調査を行いたい。また、これらの標本の一部は矢澤米三郎著『雷鳥』（岩波書店、1924年）の口絵写真や掛軸（「雷鳥の羽毛の変化 其四 雌」、矢澤原図）のモデルにもなったことがわかった。

ライチョウだけでなく、矢澤による高山植物の標本も自然科学館に残されている。約100年前のコマクサ標本は貴重で、理学部において遺伝子解析もなされている。

2-4. 新聞記事

信濃毎日新聞社および朝日新聞社のデジタル版で、矢澤や松本女子師範学校、ライチョウに関して記載された記事の確認を行った。検索期間は矢澤の存命期間に加えて、近現代の記事も確認した。松本女子師範学校の記事は矢澤が校長として在籍していた期間、ライチョウは明治から昭和にかけての記事を対象とした。明治・大正における矢澤の活躍を当時の新聞記事からとらえたいと考えた。後述する朝香宮立山縦走については、新聞でも連日記事が掲載されており、世間からの注目度の高さがうかがわれた。

3. 展示の構成と内容

展示は中央図書館の展示スペース全体を利用し、3つのコーナーと1つのトピックから構成した。以下にその概要を紹介する。

3-1. 自然科学館の標本資料とそのなりたち

最初のコーナーでは、まずタイトルにもある「博物学」とは何か、ということの説明を行った。矢澤が活躍していた時代、現代でいうところの生物学・地学という自然科学系の学問は博物学といわれていた。欧米で発達した博物学が明治以降に日本に取り入れられ、教育課程における教科のひとつであったこと、自然界に存在する様々な事物について、種類や性質などの情報を収集・記録し、さらにそれを整理・分類する学問であったことを説明した。会場では『信州大学教育学部九十年史』の実物と、そこに記されていた松本女子師範学校の理科標本室（博物教室）や、絵はがきが制作された長野県師範学校 郷土研究室（博物標本室等）についてのパネルを作成し、松本女子師範学校や松本高等学校の標本が自然科学館へ、蔵書が附属図書館へと引き継がれていることを紹介した。『郷土研究資料目録』は実物を展示ケースに入れて展示したほか、実際に手に取って内容を確認できるように複製を用意して展示ケースの横に配置した。今回の展示においては、実物の資料の展示はもちろんのこと、そこに記された内容に来場者は関心をもつであろうと考え、複製やパネルを活用した。

標本の来歴に関係することとして、松本女子師範学校の1917（大正6）年3月の火災における標本類の焼失をパネルで紹介した。この火災で松本女子師範学校の校舎10棟が焼失し、貴重な標本類も多く失われたといわれている。ライチョウ標本の場合、『郷土研究資料目録』に記載されている内、火災以前に捕獲された個体であることがわかっている3体と、捕獲時期が不明の1体を除いては、火災以降に捕獲されたと考えられる。ラベルに残された採取日の記載によると、高山植物標本も1917年3月以前に採取されたものが現存している。これらは松本女子師範学校から他の場所への貸し出しなど、何らかの理由で火災を免れたと現時点では推測している。1917年以前に焼失した品について、『大正六年十二月備品焼失残存調査書』が松本女子師範学校で作成されたことが『信州大学教育学部附属松本小学校百年史』に記載されているが、現在その所在は不明であり、引き続きの調査が必要である。

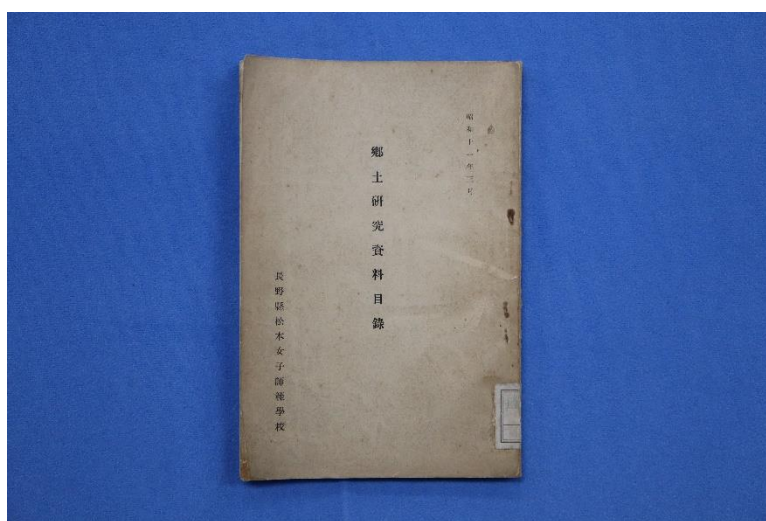


写真2 『郷土研究資料目録』

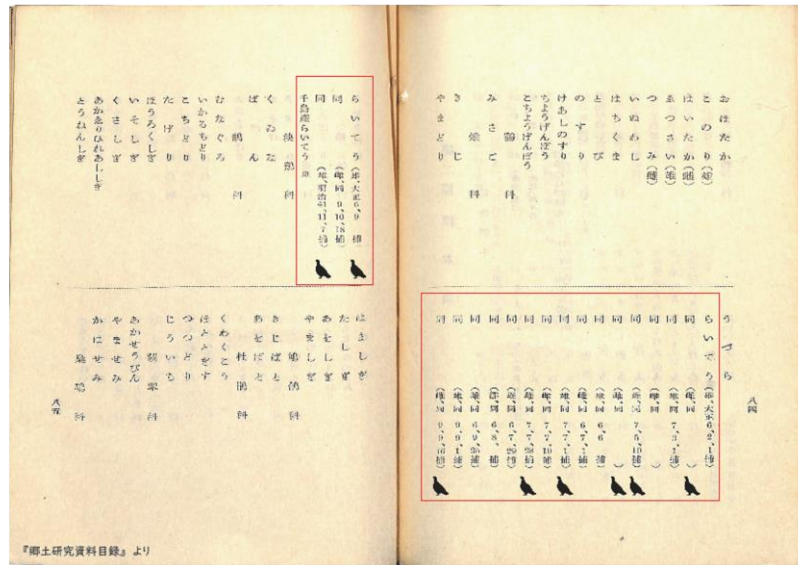



写真3 『郷土研究資料目録』赤枠で「らいてう」掲載部分を示した。
 ( マークの個体は本展で展示した標本)

3-2. ライチョウ標本と高山植物標本

矢澤米三郎等が師範学校教員時代に採集し、教育資料として保管されてきたライチョウ標本と高山植物標本が自然科学館に収蔵されていることを紹介、それらの標本の学術的価値を再認識することを目的としてその一部を展示した。

自然科学館のライチョウ標本は、先述の矢澤の著作『雷鳥』の口絵写真や図版に用いられている。明治末から大正期に採取されたもので、近年の遺伝子解析により多くが北アルプス産であることが確認された。季節に伴う換羽状況がわかり、また、成体の骨格標本や千島産の本剥製は他に類がないもので、極めて貴重な資料である。これらは松本女子師範学校時代に矢澤らが収集した標本で、戦後、教育学部松本分校標本室を経て、旧教養部に長い間保管されていた。その後医学部赤レンガ倉庫を経て、自然科学館の所蔵となったものである。収集時から100年以上経過しており、経年の劣化もみられ、今後の補修も課題である。

自然科学館のライチョウ標本は、展示ケースに入れて陳列した。春夏秋冬で雌雄を揃えた計8体、換羽の様子がわかる個体を用意した。自然科学館から借用した底部以外の5面がガラスの展示ケースを利用することで、ライチョウ標本をあらゆる角度から見るようにした。展示している個体の由来がわかるよう、標本の横にも『郷土研究資料目録』の「らいてう」の掲載部分をキャプションとして用意した。自然科学館のライチョウ標本一覧もパネルで掲示し、展示中の個体にはマークを付けた。

笠原助教制作のライチョウの生息域や遺伝子解析結果、および剥製標本についてのパネルを同会場内にて展示した。これらは理学部が松本市中央図書館でサテライト展示を行った際のパネルを一部企画展用に改訂したものである。

会場にある壁面ガラスケース内には高山植物標本を展示した。100年以上前の標本で、一部は矢澤による寄贈であること、遺伝子解析研究がされている貴重な品であることから、展示の方法は検討と議論を重ねた。標本の損傷を可能な限り抑えるためには地面に対して水平となる展示が適しているが、蛍光灯などの照明（紫外線）が直接当たると標本の色彩が損なわれる可能性が高い。そこで標本が収納できるサイズのクリアファイルにいれ、壁面に磁石で固定して展示することとした。ファイルで密閉状態にすることで標本の損傷を防ぎ、万が一破損が起きた場合もファイル内から破片が落ちることがないため、紛失を防ぐことができる。壁沿いに展示することで、照明が標本に直接あたることも一定程度防ぐことが可能となった。今回の展示では、矢澤が大正時代を中心に収集し、松本女子師範学校に寄贈した標本と、青年時代に矢澤らの指導を得て、植物学者として多くの標本を信州大学に寄贈した横内斎氏の標本など計10点を展示した。

実物の高山植物標本の横には、コマクサの遺伝子解析についての記事と最新研究についてのパネルも展示した。理学部の研究で明らかとなった解析結果について紹介している。貴重な100年前の高山植物標本が信州大学にあること、それを使って最新の研究が行われていることを来場者に知っていただきたいと考えた。

同じガラスケース内に、自然科学館に残されている矢澤が描いたライチョウの羽毛の変化（換羽）を図化した掛軸と、諏訪市博物館から借用した「動植写生図稿 第一綴」を展示した。掛軸は雌雄各2幅、全4幅存在したと思われるが、本学には雌の2幅が伝わり、雄の2幅は松本市立博物館の所蔵であることが同館への問い合わせによりわかった。掛軸の右下には「九月十六日（穂高岳）」とあり、対応する標本は自然科学館所蔵資料の中に現存している。「動植写生図稿 第一綴」も掛軸と同じく矢澤の肉筆画が残されている。これらの資料から、矢澤の描写力の高さを伺い知ることができる。



写真4 ライチョウ標本



写真5 高山植物標本、「動植写生図稿 第一綴」、掛軸

3-3. 矢澤米三郎と信濃の博物学—長野県師範学校の教員の活躍—

明治・大正期の信州の博物学研究をリードし、ライチョウ標本、植物標本を収集・保存した矢澤米三郎と河野齡蔵の活動を代表的著作物とともに紹介した。また、博物学研究を推進した明治・大正期の長野県内博物学者を紹介し、彼らのなかに信州大学の前身校のひとつである長野県師範学校出身者が多くいたことを示した。

会場には矢澤の略年表や、矢澤を中心とした人的ネットワーク図のパネルを作成して展示した。ネットワーク図には長野県内の博物学者や師範学校出身者と矢澤の繋がりを示したほか、長野県外の博物学者との繋がりも紹介した。主な人物として、共に活動することの多かった河野齡蔵、会場内に書簡を展示した牧野富太郎、高山植物標本を会場で展示した横内齋などが挙げられる。矢澤と直接の交流があった人物や師弟関係にあたる人物を中心としたほか、影響を与えられた、もしくは与えた人物を取り上げて紹介した。

諏訪市博物館から借用した矢澤家で保管されてきた『矢澤ノート』の他、辞令や出張命令といった公的文書もこのコーナーで展示した。

『矢澤ノート』について調査している段階で、矢澤本人がノートの裏表紙に「K.Yazawa」とイニシャルを記していることがわかった。日本国内で発行されている書籍、新聞等には明治から平成にかけて「やざわよねさぶろう」とルビがふられており、そのように周知もされている。今回の調査により、「こめさぶろう」が矢澤米三郎の本来の読み方である可能性がでてきた。1902年に発行された『植物学雑誌/The Botanical Magazine』16巻186号に牧野富太郎が英語で執筆した報告書「Observations on the Flora of Japan」が掲載され、そこでヒメスミレサイシン/*Viola yazawana* Makinoが紹介された。学名は牧野が命名しており、*yazawana*は矢澤への献名である。この報告書で牧野は矢澤をMr. Komesaburō Yazawaと紹介している。前年発行の15

巻でも、牧野は矢澤をMr. Komesaburō Yazawaと記載している。世間一般には「よねさぶろう」が通称となっていたが、矢澤本人の自認は「こめさぶろう」であり、知人にはそう名乗っていた可能性があるという推測される。現段階では推測の域を出ておらず、今後も引き続きの調査が必要である。

牧野富太郎からの書簡も、矢澤家で保管されてきた資料である。牧野がタカネマンテマ標本を矢澤に要望している内容や、矢澤の質問に対して牧野が回答していたことが書簡から伺える。展示した書簡は1918（大正7）年と1933（昭和8）年のものだが、1918年には文語調で書かれていたのが、1933年には口語調となっていることにも注目した。大正から昭和への時代の変化を感じることができる。書簡の内容からは100年前の自然科学の歴史を感じるが、文体の変化も人文科学として興味深い資料といえる。ひとつの資料を様々な角度から見る点で、文理融合という面からも展示を見てもらいたいと考えた。

会場では矢澤と河野の著作や、中央図書館に引き継がれている松本女子師範学校の蔵書も展示した。これらは貴重な資料でもあるため、展示ケースに入れて展示した。一部の書籍は本文が読めるようにページを開いた形で陳列した。また中央図書館の協力を得て、当展に関連する書籍を会場に用意した。矢澤と河野の共著である『日本アルプス登山案内』（岩波書店、1916年）や牧野富太郎の著作、ライチョウやコマクサに関する書籍などを来場者が自由に読めるようにした。書籍は大正期から近年のものまで幅広く揃えられ、明治・大正時代からの「信濃博物学」が現代にまで引き継がれていることを感じさせた。



写真6 牧野富太郎からの書簡



写真7 会場内で読める当展関連書籍

トピック 皇族登山と矢澤米三郎

諏訪市博物館の矢澤家資料を調査した際に発見した『矢澤ノート』の内、1921（大正10）年のノートに朝香宮鳩彦王の立山縦走に際し、矢澤が案内役を務めた記録が記されていた。鋭い観察眼で書かれた記録の一部を紹介した。

『矢澤ノート』の実物は展示ケースに入れて展示したが、このコーナーではパネルを利用して内容を一部紹介した。矢澤ノートはいわゆる手帳とよばれるサイズであり、複数の手帳に書かれた記述を紹介するには拡大してパネルで説明するのが適していると考えた。

パネルには、参考にした『宮様山へ』（立山博物館）や『松本市史』、および矢澤ノートの記述による登山行程表をまとめ、そこから読み取った登山ルートを地図上に示し、一行の宿泊場所やライチョウの目撃場所を地図に記した。これらの参考資料をそれぞれ照らし合わせて見られるように展示ケースに開いて展示した。

矢澤はノートに様々なことを書き綴っていた。縦走の際には山で見かけた植物の種類、ライチョウ、昆虫、山脈、立山カール等についてスケッチやメモを残している。案内役を務めている間も、博物学者としての観察を行っていたことがわかる。1921年8月4日、朝香宮鳩彦王一行の立山縦走時にはセッケイカワゲラ（雪渓積翅）類の新属・新種を発見しており、後の1931（昭和6）年に松村松年により「ハネナシカワゲラ *Apteroperla yazawai* Matsumura, 1931」として新種記載されている。今回展示している『矢澤ノート』には「*Apteroperla yazawae* Mats.」として記され、朱下線が引かれている。学名が付されるのは新種記載のタイミングとなるので、この記述は松村とのやり取りの後に追加された記述ではないかと思われる。実際に新種記載された時の種小名「*yazawai*」ではなく「*yazawae*」と書き込まれていることも興味深い。「姓+ae」は女性に献名する場合の表記（姓が“a”で終わる場合には、aを重ねずに省略される場合も多い）で、男性への献名時には「姓+i」と表記される。

「明治・大正期 信濃博物学の夜明けと長野県師範学校－矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に－」実施報告

また、ノートには自然観察以外に関しても多くの記述があった。立山縦走の際には朝香宮嶋彦王が「雷鳥ノ雛ハ可愛相ナリ」（ライチョウの雛はかわいいなあ）と言葉にしていた（御恩召）と残しており、その他、縦走のメンバーの氏名もノートに書かれていた。

4. おわりに－感想・今後の課題・反省点

昨年度の企画展はコロナウイルス感染対策の面から大学は入構規制をとっており、学外者は展示見学ができない期間があった。大学史資料センターにおいても展示開催前の一般向けの広報を控えざるを得ない状況にあった。今年度は9月26日（月）より「新型コロナウイルス感染症拡大防止のための信州大学の行動基準」が引き下げられ、中央図書館において限定的に学外者の図書館利用が可能となった。学外者は学習・教育研究のための資料利用、もしくは館内展示の見学を目的とする場合に30分の図書館滞在が可能となっている。入館にあたっては「入館チェックシート」の記入が必要となる。中央図書館の統計情報によると、12月14日（水）の時点での図書館を利用した学外者は160名、館内展示の見学もしくは館内展示の見学と学術資料の利用の両方を目的と回答した人数は合わせて83名だった。

企画展が開催してすぐに信濃毎日新聞と毎日新聞に当展についての記事が掲載された。各新聞社からの取材は当展が始まる前に行われた。今年度は学外者の展示見学が可能ということもあり、開催前に一般向けの広報が可能であった。開催期間中にMGプレスと市民タイムスの取材が行われ、12月16日（金）にMGプレスの4面、市民タイムスの23面に記事が掲載された。当展の展示開催に協力を得た諏訪市博物館では所蔵資料が展示されたということもあり、信大NOW135号を置いてもらえることとなった。その他、理学部を会場に開催された「日本動物学会中部支部大会」および同大会公開シンポジウム「日本列島の多様な動物たち：高山から深海まで」の参加者も多く見学に訪れた。例年に比べても多数の見学者が訪れた結果となった。

開催期間中にはギャラリートークを3回開催した。今回の企画展は、人文科学と自然科学が融合した内容ということもあり、「矢澤米三郎・河野齡蔵と信濃博物学」を福島特任教授、「高山植物研究の最前線」を東城教授、「高山帯でのライチョウの暮らし」を笠原助教が講師を務めた。参加した職員からは好評であったが、反省点として、学生の参加がなかったことが挙げられる。学生に向けての広報が不足していたと理由を推測した。TwitterやWebサイトで呼びかけはしていたが、広報期間が短く、加えて大学史資料センターは本学卒業生からの資料収集が活動の中心のひとつにあることもあり、SNSは学生より卒業生が多く見ていると思われることから在学生にあまり周知できなかった。展示自体には学生の見学者も多かったことから、イベントへの参加を呼び掛ける機会を増やすことが必要と考えた。次回以降は学生の目につきやすい学食やエレベーターに展示ポスターや開催イベントチラシの掲示を検討している。

12月17日（土）-18日（日）に第8回 山岳科学学術集会在松本キャンパスで開催され、18日には公開シンポジウム「日本の『山岳科学』研究－明治・黎明期から現在、そして将来へむけて」が行われた。このシンポジウムの進行を務めた東城教授より当展の紹介がなされ、福島特任教授

が「矢澤米三郎・河野齡蔵と信濃博物学」、笠原助教と西海功氏（国立科学博物館）が「剥製が教えてくれたー中央アルプスのライチョウはどの集団と遺伝的に近かったのか」、高梨功次郎准教授（山岳科学研究拠点）が「高山におけるマメ科植物ー根粒菌共生」、四方圭一郎氏（飯田市美術博物館）が「高山蛾研究の黎明期と矢澤米三郎」の講演を行った。

大学史資料センターでは今後も学内・学外の研究施設と協力して調査、企画展を始めとしたイベントの開催を行っていく。

謝辞

当展の開催にあたっては多くの方々の協力を得た。感謝の意を表する。

ご助言、ご協力をいただいた皆様（五十音順、敬称略）

自然科学館、諏訪市博物館、理学部

展示資料の借用にご協力いただいた皆様

自然科学館、諏訪市博物館

また、当展の企画は大学史資料センターの福島正樹が中心となっており、附属図書館館長東城幸治教授、笠原里恵助教を始め、多くの職員の協力を得て開催が実現した。

注

- 1) 企画展「SUNSー人をつなぐ・キャンパスをつなぐー」(Web版)、エピソード集

https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/news/docs/SUNS_01_pxmm.pdf

https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/news/docs/SUNS_Episode_px.pdf

- 2) 企画展「SUNSー人をつなぐ・キャンパスをつなぐー」実施報告

<https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/records/2000728>

- 3) 信大NOW135号

<https://www.shinshu->

[u.ac.jp/guidance/publication/summary/2022/shindaiNOW_vol135/index.html#page=1](https://www.shinshu-u.ac.jp/guidance/publication/summary/2022/shindaiNOW_vol135/index.html#page=1)

- 4) 信州大学自然科学館 Newsletter 創刊号

<https://www.shinshu->

[u.ac.jp/institution/museum/news/docs/%E7%AC%AC1%E5%8F%B7%E3%80%80%E8%87%AA%E7%84%B6%E7%A7%91%E5%AD%A6%E9%A4%A8Newsletter%EF%BC%88%E5%89%B5%E5%88%8A%E5%8F%B7%EF%BC%89.pdf](https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/museum/news/docs/%E7%AC%AC1%E5%8F%B7%E3%80%80%E8%87%AA%E7%84%B6%E7%A7%91%E5%AD%A6%E9%A4%A8Newsletter%EF%BC%88%E5%89%B5%E5%88%8A%E5%8F%B7%EF%BC%89.pdf)

信州大学大学史資料センター企画展

「明治・大正期 信濃博物学の夜明けと長野県師範学校－矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に－」実施報告

5) 信州大学自然科学館 Newsletter第5号

<https://www.shinshu->

[u.ac.jp/institution/museum/news/docs/%E7%AC%AC5%E5%8F%B7%E3%80%80%E8%87%AA%E7%84%B6%E7%A7%91%E5%AD%A6%E9%A4%A8NewsLetter.pdf](https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/museum/news/docs/%E7%AC%AC5%E5%8F%B7%E3%80%80%E8%87%AA%E7%84%B6%E7%A7%91%E5%AD%A6%E9%A4%A8NewsLetter.pdf)

自然科学館ライチョウ標本一覽



No	台座番号	採取月	性別	齢	標本採取日	採取場所	制作所	剥製の状態	郷土研究資料目録 (仮番号)	郷土研究資料目録 (雌雄・捕獲年月日)	台座 表書き	台座前面 ラベル1 (和名欄)	台座前面 ラベル2	台座裏ラベル	台座裏 手書き	台座側面	「雷鳥」岩波書店 挿絵(雷鳥写真)	その他			
1	イ071	5月	雌	成鳥	1918(大正7)年5月10日	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	6	雌、大正7.5.10捕	モ173	14	鳥414	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内拾 10/12	長野縣松本女子師範学校	ホ○	「女師」焼印	第四図 ♀ 五月	
2	イ073	5月	雄	成鳥	1918(大正7)年5月10日	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	5	雄、大正7.5.10捕	モ175	20	鳥420					ヘ○			
3	イ074	3月	雌	成鳥	1918(大正7)年3月	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	4	雌、大正7.3.1捕	モ176	7	鳥307	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内七 7/12	長野縣松本女子師範学校	イ	「女師」焼印	第四図 ♀ 三月	
4	イ075	3月	雄	成鳥	1918(大正7)年3月	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	3	雄、大正7.3.1捕	モ177	5	鳥	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内六 6/12	長野縣松本女子師範学校	ロ	「女師」焼印	第四図 ♂ 三月	
5	イ076	2月	雌	成鳥	1917(大正6)年2月	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	2	雌、大正6.2.1捕	モ178	6	鳥306	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内参 3/12	長野縣松本女子師範学校	ハ	養生テープ○	第三図 ♀ 雷鳥の冬羽	
6	イ072	5月	雄	成鳥	1918(大正7)年5月10日	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	5	雄、大正7.5.10捕	モ174	13	鳥413	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内伍 5/12	長野縣松本女子師範学校	ハ	「女師」焼印	第四図 ♂ 五月	
7	イ085	9月	雄	成鳥	1920(大正9)年9月	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	15	雄、大正9.9.1捕	モ187	9	鳥309					ホ	「女師」焼印・養生テープ○		
8	イ063	7月	雌	成鳥	1917(大正6)年7月29日	白馬山頂上	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	12	雌、大正6.7.29捕	モ185	2	鳥					ト			
9	イ086	7月	雄	成鳥	1918(大正7)年7月28日	白馬山頂上	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	11*	雌、大正7.7.28捕	モ188	15	鳥415	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内九 9/12	長野縣松本女子師範学校	ニ	「女師」焼印	第五図 ♀ 七月	成鳥
10	イ062	7月	雄	成鳥	1918(大正7)年7月	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	9	雄、大正7.7.1捕	モ184	16	鳥416	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内式 2/12	長野縣松本女子師範学校	ト	「女師」焼印	第五図 ♂ 七月	
11	イ077	6月	雄	成鳥	1917(大正6)年6月	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	7	雄、大正6.6.捕	モ179	10	鳥410	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内四 4/12	長野縣松本女子師範学校	ヘ	養生テープ○		
12	イ084	9月	雄	成鳥	1917(大正6)年9月	情報なし	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	17	雄、大正6.9.捕	モ186	19	鳥419	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内壱 1/12	長野縣松本女子師範学校	ロ	「女師」焼印	第五図 九月	
13	イ087	9月	雌	成鳥	1917(大正6)年9月25日	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	14	雌、大正6.9.25捕	モ189	18	鳥418	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内拾壱 11/12	長野縣松本女子師範学校	ニ	「女師」焼印		
14	イ088	10月	雄	成鳥	1920(大正9)年10月18日	乗鞍岳	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	18	雄、大正9.10.18捕	モ190	4	鳥304					ー	「女師」焼印・未口	第五図 十月	
15	イ089	11月	雄	成鳥	(明治?)年11月17日	情報なし	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	19	雄、明治41.11.7捕	モ191	1						ニ	「女師」焼印・養生テープ○	第五図 十一月	
16	イ081	7月	雌	成鳥	1917(大正6)年7月	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	8	雌、大正6.7.1捕	モ183	12	鳥412					ホ			
17	イ083	9月	雌	成鳥	1920(大正9)年9月16日	穂高	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	16	雌、大正9.9.16捕	モ185	8	鳥308					イ	「女師」焼印		雷鳥羽毛の変化(其四 雌)
18	イ079	2月	雄	成鳥	1917(大正6)年2月	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	1	雄、大正6.2.1捕		3								第三図 ♂ 雷鳥の冬羽	松本高等学校より
19	イ080	7月	雌	成鳥	1918(大正7)年7月10日	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	10	雌、大正7.7.10捕	モ182	17	鳥417					ヘ	養生テープ○		台座裏にテープ「夏ライチョウ」
20	イ093	情報なし	雄	成鳥	情報なし	千鳥	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	20	雄、記載なし	モ185	11	鳥411					ヘ			
21	44	12月	雌	成鳥	1914(大正3)年	乗鞍岳	情報なし	仮剥製													
22	45	8月	雄	成鳥	1914(大正3)年	常念岳	情報なし	仮剥製													
23	42	情報なし	雌?	成鳥	情報なし	情報なし	情報なし	本剥製													鶏、(協¥)140 1
24	43(仮)	情報なし	雄	成鳥	情報なし	情報なし	情報なし	本剥製					ライチョウ								鶏、(協¥)140 2
25	44(仮)	情報なし	雄	成鳥	情報なし	情報なし	情報なし	本剥製													
26	45(仮)	情報なし	雌	成鳥	情報なし	情報なし	情報なし	本剥製													
27	情報なし	情報なし	雌	成鳥	1917(大正6)年8月	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製	13	雌、大正6.8.捕											雌
28	イ092	台座無し	幼鳥	情報なし	情報なし	情報なし	情報なし	本剥製			モ194										雷鳥卵(木箱入り) 238
29	イ086	7月	情報なし	幼鳥	1917(大正6)年7月28日	信濃	長野県松本市高山製作所標本部	本剥製			モ188	15	鳥415	雷鳥	大正9年10月4日購六	拾貳箇内九 9/12	長野縣松本女子師範学校	ニ	「女師」焼印	第五図 ♀ 七月	
30	1	1月	雄	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
31	2	1月	雌	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
32	3	3月	雄	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
33	4	3月	雌	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
34	5	7月	雌	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
35	6	7月	雄	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
36	7	7月	雄?	幼鳥		信濃	情報なし	本剥製													
37	8	7月	雌	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
38	9	3月	雄	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
39	10	3月	雌	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
40	11	10月	雌	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
41	12	10月	雄	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													
42	13	7月	情報なし	雌		信濃	情報なし	本剥製													
43	14	8月	情報なし	幼鳥		信濃	情報なし	本剥製													
44	15	9月	雌	成鳥		信濃	情報なし	本剥製													

*郷土研究資料目録では「雌、大正7年7月28日捕」の記載だが、標本ラベルより「大正6年」の可能性あり。

自然科学館所蔵のライチョウ標本リスト(理学部笠原助教)より

郷土研究資料目録及び、再調査の結果



本企画展で展示している標本

(作成 田中圭美)

「郷土研究資料目録」の「動物標本」項目にある「らいてう」目録に1~20までの仮番号をつけて整理したものである。

自然科学館所蔵のライチョウ標本リストの「性別」および「標本採取日」と郷土研究資料目録の記載(雌雄・捕獲年月日)から、郷土研究資料目録に記載されている標本が自然科学館の標本であることがわかった。

標本の台座に貼られたラベルと手書きの文字などを可能な限り読み取ることができたので、今後の詳しい調査で、ライチョウ標本が受け継がれてきた詳細な経緯などが分かる可能性がある。

また、これらの標本の一部は『雷鳥』(矢澤米三郎著)の挿絵(写真)や掛軸(「雷鳥の羽毛の変化 其四 雌」、矢澤原図)のモデルにもなっている。

「明治・大正期 信濃博物学の夜明けと長野県師範学校－矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に－」

(2022年 秋期開催)

1. 資料目録

No.	名 称	年 代	所 蔵
1	『郷土研究資料目録』	1936 (昭和11) 年	中央図書館
2	『信州大学教育学部九十年史』	1965 (昭和40) 年	中央図書館
3	ライチョウ標本 (8)		自然科学館
3-1	ライチョウ標本 オス 春毛	1918 (大正7) 年5月10日 採集	
3-2	ライチョウ標本 メス 春毛	1918 (大正7) 年5月10日 採集	
3-3	ライチョウ標本 オス 夏毛	1917 (大正6) 年7月29日 採集・白馬山頂上	
3-4	ライチョウ標本 メス 夏毛	1917 (大正6) 年7月28日 採集・白馬山頂上	
3-5	ライチョウ標本 オス 秋毛	1917 (大正6) 年9月1日 採集	
3-6	ライチョウ標本 メス 秋毛	1920 (大正9) 年9月16日 採集・穂高	
3-7	ライチョウ標本 オス 冬毛	明治X年11月17日 採集	
3-8	ライチョウ標本 メス 冬毛	1917 (大正6) 年2月1日 採集	
4	高山植物標本 (10)		自然科学館
4-1	コマクサ標本	1908 (明治41) 年	
4-2	コマクサ標本	1912 (大正元) 年	
4-3	ヤツガタケムグラ標本	1914 (大正4) 年	
4-4	クロマメノキ標本	1919 (大正8) 年	
4-5	オオヤマハコベ標本	1926 (大正15) 年	
4-6	ミヤマチドリ標本	1914 (大正3) 年	
4-7	ミヤマチドリ標本	不明	
4-8	オオヤマサギソウ標本	1920 (大正9) 年	
4-9	オオヤマサギソウ標本	不明	
4-10	コマクサ標本	1930 (昭和5) 年	
5	掛軸 雷鳥の羽毛の変化 (其四 雌)	大正末～昭和初期	自然科学館

6	『動植写生図稿』 矢澤米三郎画	年未詳（大正～昭和初期か）	諏訪市博物館
7	長野県松本女子師範学校の蔵書		中央図書館
7-1	『崇教館学則』	1846（弘化3）年刊	
7-2	『小学新理科』 卷一、卷二、卷三	1901（明治34）年	
7-3	『小学唱歌集』 初編		
7-4	『物理学初等実験集』	1914（大正3）年	
8	辞令（長野県尋常師範学校訓導）	1889（明治22）年	諏訪市博物館
9	出張命令（教授用植物採集のため御岳山へ出張）	1893（明治26）年	諏訪市博物館
10	辞令（松本女子師範学校長）	1905（明治38）年	諏訪市博物館
11	辞令（信濃博物調査会委員長）	1913（大正2）年	諏訪市博物館
12	辞令（松本高等学校講師）	1919（大正8）年	諏訪市博物館
13	『草鞋』	1921（大正10）年	中央図書館
14	矢澤ノート（大正10年ほか）	1921（大正10）年	諏訪市博物館
15	『信濃博物学雑誌』 創刊号	1902（明治35）年	中央図書館
16	『史蹟名勝天然記念物調査報告』 第1輯	1923（大正12）年	中央図書館
17	牧野富太郎書簡（矢澤宛）大正7年	1918（大正7）年	諏訪市博物館
18	牧野富太郎書簡（矢澤宛）	1933（昭和8）年	諏訪市博物館
19	矢澤米三郎の主な著作（5）		
19-1	帝国生理学提綱	1899（明治32）年	個人
19-2	日本アルプス登山案内	1916（大正5）年 河野齡蔵共著・岩波書店	中央図書館
19-3	雷鳥	1929（昭和4）年 岩波書店	中央図書館
19-4	信濃郷土叢書・第9篇・信濃天然記念物	1929（昭和4）年 信濃郷土文化普及会	中央図書館
19-5	日本アルプスの研究	1935（昭和10）年 岩波書店	中央図書館
20	河野齡蔵の主な著作（4）		
20-1	高山植物の研究	1917（大正6）年 岩波書店	中央図書館
20-2	高山研究	1927（昭和2）年 岩波書店	中央図書館
20-3	日本高山植物図説	1931（昭和6）年 朋文堂	中央図書館
20-4	信濃郷土叢書・第10編・日本アルプス	1929（昭和4）年 信濃郷土文化普及会	中央図書館
21	矢澤ノート	1921（大正10）年	諏訪市博物館
22	『立山』（吉沢庄作）	1925（大正14）年	中央図書館（小谷文庫）

23	祝儀袋	1921（大正10）年8月7日	諏訪市博物館
24	『松本市史』上巻・下巻	1935（昭和10）年	中央図書館
25	手塚順一郎『山の写真のうつし方』	1932（昭和7）年	個人
26	信濃植物誌－1983－ 横内齋著	1983（昭和58）年	銀河書房
27	長野県植物誌（清水建美監修）	1997（平成9）年	中央図書館
28	長野県版レッドリスト 植物編	2014（平成26）年	長野県環境自然保護課・長野県環境保全研究所編著
29	長野県版レッドリスト 動物編	2015（平成27）年	長野県環境自然保護課・長野県環境保全研究所編著

信州大学大学史資料センター 2022 年度秋季企画展

明治・大正期 信濃博物学の夜明けと長野県師範学校

－矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に－

はじめに－信州大学自然科学館のライチョウ標本・高山植物標本を概観する。

信州大学の前身校のひとつ、長野県師範学校・長野県松本女子師範学校は、初等教育の教員養成機関として 1873(明治 6)年に設置された師範講習所に起源があります。その卒業生は、県下各初等学校の教壇にたつとともに、地域の人文・自然科学の研究をも担いました。今回の企画展では、師範学校の教員による自然科学研究の代表ともいえる松本女子師範学校初代校長矢澤米三郎と彼のライチョウ研究をはじめとする博物学研究、とりわけ矢澤が女子師範に寄贈し、本学自然科学館に継承されたライチョウ標本・高山植物標本をとりあげ、山岳の動植物にフィールドを求めた矢澤の研究をふりかえります。

<自然科学館>

信州大学自然科学館は、各キャンパスに分散している貴重資料の展示、データベース化と公開、小中高校生・市民向け体験学習の実施等、教育研究活動への協力を行うため、2012 年 8 月に開設された博物館施設です。

<大学史資料センター>

信州大学大学史資料センターは、2019 年の創立 70 周年を契機に、散逸が危惧される本学の歴史に関する資料の体系的な収集・整理・保存・公開・展示を担う施設として 2017 年 4 月に設立されました。

*博物学とは

明治維新以後、それまで動植物を薬物として活用するための学問であった本草学にかわり、欧米で発達した博物学が本格的に取り入れられました。博物学は植物、動物、鉱物といった自然界に存在する物について、種類や性質などの情報を収集・記録し、さらにそれを整理・分類する学問で、教育課程における教科のひとつでもあった。明治時代末～大正時代に生物学や地学へと発展していきました。

1 自然科学館の標本資料とその成り立ち

松本女子師範学校や松本高等学校の標本や蔵書が自然科学館の標本類(動物、植物、鉱物、化石など)や附属図書館の蔵書に引き継がれていることは、『郷土研究資料目録』(松本女子師範 1936 年)などからわかります。

①『郷土研究資料目録』 長野県松本女子師範学校刊 1936(昭和11)年

1936(昭和 11)年 3 月に長野県松本女子師範学校が発行した郷土研究のために整備された参考書類と標本類に関する目録。そのなかに動物標本として「らいてう」の目録があり、雌雄・捕獲年月日が記載されていて、自然科学館所蔵のライチョウ標本との同定作業を行うことができ、それらが本目録掲載の標本であることがわかった。植物標本の目録は収録されていない。

②『信州大学教育学部九十年史』 信州大学教育学部創立九十周年記念会 1965(昭和 40)年

教育学部創立 90 周年を記念して 1965(昭和 40)年に出版された。明治初期の長野県・筑摩県の各師範講習所からはじめ、各県師範学校、両県合併後の長野県師範学校、長野県尋常師範学校、長野県師範学校、官立長野師範学校、および長野県松本女子師範学校の校史を叙述する。その中の校舍略図、校舍配置図には、標本室が記され、本文の記述により、1895(明治 28)年に博物教室(標本室)が新設されたことがわかる。

* 師範学校の博物室、標本室

松本女子師範学校の理科標本室(博物教室)は1905(明治38)年の開校時に配置されていたことは、校舎配置図に確認できる。その構造は、先行する長野県師範学校の博物教室(標本室)に準じていたものと思われる。師範学校は1908(明治41)年、女子師範は1917(大正6)年に校舎の火災で標本室は焼失したが、再建された。表示の各図面は再建後のものである。女子師範の標本室の内部の様子はわからないが、昭和初期の師範学校の標本室の写真(絵はがき)から推測できる。

2 ライチョウ標本と植物標本

自然科学館にはライチョウ標本、高山植物標本が収蔵されています。それらは矢澤米三郎等が師範学校教員時代に採集し、教育資料として保管されてきたものです。それらの標本を紹介し、その学術的価値について考えます。

<自然科学館のライチョウ標本>

自然科学館のライチョウ標本は、長野県松本女子師範学校校長矢澤米三郎らが、明治末から大正期に採取したもので、近年の遺伝子解析により多くが北アルプス産であることが確認された。季節に伴う換羽状況がわかり、また、成体の骨格標本や千島産の本剥製は他に類がないもので、極めて貴重な資料である。矢澤著『雷鳥』(1929年 岩波書店)の口絵写真や図版の元ともなっている。これらは松本女子師範学校の旧蔵資料で、戦後、教育学部松本分校標本室を経て、旧教養部に長い間保管されていたもので、医学部赤レンガ倉庫を経て、自然科学館の所蔵となったものである。収集時から100年以上経過しており、経年の劣化もみられ、今後の補修も課題である。

③ ライチョウ標本

ライチョウ標本	オス	春毛	1918年5月10日採集	自然科学館蔵
ライチョウ標本	メス	春毛	1918年5月10日採集	自然科学館蔵
ライチョウ標本	オス	夏毛	1918年7月採集・信濃	自然科学館蔵
ライチョウ標本	メス	夏毛	1918年7月28日採集・白馬山頂上	自然科学館蔵
ライチョウ標本	オス	秋毛	1917年9月1日採集	自然科学館蔵
ライチョウ標本	メス	秋毛	1920年9月16日採集・穂高	自然科学館蔵
ライチョウ標本	オス	冬毛	明治(年不明)11月17日採集	自然科学館蔵
ライチョウ標本	メス	冬毛	1917年2月1日採集	自然科学館蔵

<自然科学館の高山植物標本>

自然科学館には様々な来歴の植物標本がある。そのなかで最も古い履歴を持つものが、松本女子師範学校標本室に由来するもので、初代校長矢澤米三郎らによって収集されたものである。今回の展示では、矢澤が大正時代を中心に収集し、女子師範学校に寄贈した標本と、青年時代に矢澤らの指導を得て、植物学者として多くの標本を信州大学に寄贈した横内斎氏の標本を展示した。

④ 高山植物標本

コマクサ標本 1908 自然科学館蔵

1908(大正7)年8月にハヶ岳で採集したもの。松本女子師範学校専用の標本カードを使用。台紙左上に「矢澤先生寄贈」の朱印を捺す。

コマクサ標本 1912 自然科学館蔵

1912(大正1)年8月6日にハヶ岳で採集したもの。信濃博物調査会の標本カードを使用。台紙左上に「矢澤先生寄贈」の朱印を捺す。

ヤツガタケムグラ標本 1914 自然科学館蔵

1914(大正3)年7月にハヶ岳で採集したもの。矢澤氏所蔵と記された標本カードを使用。

クロマメノキ標本 1919 自然科学館蔵

1919(大正8)年7月10日に槍ヶ岳で採集したもの。矢澤氏所蔵と記された標本カードを使用。

オオヤマハコベ標本 1927 自然科学館蔵

1926(昭和1)年に塩見岳麓で採集したもの。矢澤氏所蔵と記された標本カードを使用。

ミヤマチドリ標本 1914 自然科学館蔵

1914(大正 3)年に八ヶ岳で採集したもの。はじめガッサンチドリとしていたが、ミヤマチドリに訂正している。信濃博物調査会の標本カードを使用。

ミヤマチドリ標本 不明 自然科学館蔵

塩見岳で採集したもの。採集年は不明。信濃博物調査会の標本カードを使用。

オオヤマサギソウ標本 1920 自然科学館蔵

1920(大正 9)年 7 月に上高地で採集したもの。信濃博物調査会の標本カードを使用。

オオヤマサギソウ標本 不明 自然科学館蔵

白馬岳で採集したもの。採集年は不明。信濃博物調査会の標本カードを使用。

コマクサ標本 1930 自然科学館蔵

矢澤米三郎の指導を受けた植物学者・横内斎が 1930(昭和 5)年 7 月に乗鞍岳で採集したもの。「長野県の植物」「横内斎氏収集・寄贈標本」と印刷された標本カードを使用。横内家が信州大学に寄贈するに際して付したものである。

⑤ 掛軸 雷鳥の羽毛の変化(其四 雌) 矢澤米三郎画 大正時代

ライチョウの羽毛の変化(換羽)を図化した掛軸。雌雄各2幅、全4幅存在したと思われるが、本学には雌の2幅が伝わる。ほかの2幅は松本市立博物館所蔵で、1幅は雄の換羽、1幅は羽の詳細図を付して描かれている。展示しているのは、8月から11月の変化を示したものの。右下には「九月十六日(穂高岳)」とあり、所蔵(展示)資料の中に該当する標本がある。

⑥ 『動植写生図稿』 矢澤米三郎画 年未詳(大正～昭和初期か)

縦横10cmほどの画用紙に肉筆で描き、それをアルバムに貼ったもの。矢澤のスケッチ力を知ることができる。アルバムの表紙に墨で YAZAWA と記す。

<松本女子師範学校の蔵書>

松本女子師範学校の蔵書約 9,000 冊は、長野師範学校を経て信州大学附属図書館に引き継がれた。これらの蔵書のうち長野県や教育に関する図書のほか、明治期の教科書、松本藩多湖家に伝わる藩校資料、古文書など約 1,300 点が、『郷土研究資料目録』に参考書として掲載されている。

⑦ 松本女子師範学校の蔵書

『崇教館学則』 1846(弘化 3)年刊 中央図書館蔵

多湖文庫。多湖寛齋(安元)が作成した松本藩の藩校「崇教館」の学則。文化四年の初案から弘化三年の定稿までの諸段階のものが一冊にまとめられており、改案の様子をたどることができる。

『小学新理科』 巻一、巻二、巻三 1901(明治 34)年 中央図書館蔵

高等小学校児童用教科書。全 4 巻。学年別に使用したと思われ、1巻各巻の巻頭には、彩色の極めて詳細なイラストが添えられている。

『小学唱歌集』 初編

文部省音楽取調掛が編集した日本初の五線譜による音楽教材で、中にはちょうちょ、君が代などの唱歌が掲載されている。

『物理学初等実験集』 1914(大正 3)年 中央図書館蔵

文部省翻訳による物理学の実験集。底本は、フランスの物理学者 Henri Abraham による "Recueil d' expériences élémentaires de physique" 1904(明治 37)年。


*松本女子師範学校の火災と標本資料

1917(大正 6)年 3 月 18 日、松本女子師範学校は本校教室全部と雨天体操場、講堂、物置などを全焼した。「信濃毎日新聞」によると、高山植物の標準標本と雷鳥標本が被害を受けたに違いないとの記事を載せる。

3 矢澤米三郎と信濃博物学研究－長野県師範学校の教員の活躍－

明治・大正期の信州の博物学研究をリードし、ライチョウ標本、植物標本を取集・保存した矢澤米三郎と河野齡蔵の活動を代表的著作物とともに紹介します。また、彼らを取り巻いて、博物学研究を推進した明治大正期の県内博物学者を紹介し、彼らの中に師範学校出身者が多くいたことを示します。


<矢澤米三郎と長野県師範学校>

⑧ 辞令(長野県尋常師範学校訓導) 1889(明治22)年 諏訪市博物館蔵 


明治22年、長野県師範学校を卒業した矢澤は、同校訓導の辞令を受け、教員としての歩みを始めた。

⑨ 出張命令(教授用植物採集のため御岳山へ出張) 1893(明治26)年 諏訪市博物館蔵 


明治26年、矢澤は教授用の植物採集のため、御岳山に登る。矢澤らの標本採集が公務出張として行われたことがわかる。

⑩ 辞令(松本女子師範学校校長) 1905(明治38)年 諏訪市博物館蔵 

明治38年、長野県は師範学校女子部を独立させ、松本女子師範学校を創設。矢澤はその初代校長に任命された、教頭には下伊那高等女学校長の河野齡蔵を迎えた。

⑪ 辞令(信濃博物調査会委員長) 1913(大正2)年 諏訪市博物館蔵 

師範学校を含む中等学校に、博物標本をそろえるため、明治45年中等学校長会議に建議して、中等学校教員による標本収集を開始、長野・松本両師範学校に保管して研究資料とした。大正2年には県の予算化がなされ、矢澤はこの調査会の委員長に任命されている。信濃博物学会の活動が停止する時期にあたっている。


⑫ 辞令(松本高等学校講師) 1919(大正8)年 諏訪市博物館蔵 

大正8年、松本高等学校が全国9番目の高等学校として開講すると、矢澤は自然科学の講座を担当する講師に任命され、開校と同時に発足した松本高等学校山岳部の初代部長になっている。

⑬ 『草鞋』 松本高等学校山岳部 1921(大正10)年 中央図書館蔵

『草鞋』・『わらぢ』は、人文・経法・理学部の前身校である松本高等学校の山岳部報である。山岳部は、松高が開校した翌年の大正9年1月の校友会発足と同時に創部となり、大正10年10月に山岳雑誌『草鞋』を創刊している。創刊号は、当時の部長が矢澤米三郎講師(松本女子師範学校校長・信濃山岳会長)だったこともあり、松高山岳部員と信濃山岳会員の有志の集まりでつくった「原人社」という組織が発行し、第2号から『わらぢ』として第4号まで続いた。しばらく休刊し、松本高等学校山岳部が復活の第1号(1927年)を発行。その後は断続的に1946(昭和21)年の第7号(最終号)まで続いた。

<矢澤米三郎の博物学研究>

⑭ 矢澤ノート 矢澤家資料 1921(大正10)年 諏訪市博物館蔵 

大正10～14年頃の手帳。日本ノート学用品株式会社製。月日を記入する日記形式の書式だが、矢澤は記録用のフィールドノートとして使用している。内容は、女子師範で開催された専門家の記録や、登山に関わる記録や高山植物・動物の観察メモを含んでいる。

⑮ 『信濃博物学雑誌』 創刊号 信濃博物学会発行 1902(明治)35年 中央図書館蔵

矢澤米三郎が明治33年、東京高等師範学校研究科修了し、長野県師範学校に帰任したことを契機に、明治35年6月信濃博物学会を創立。その機関誌として同年8月創刊。雑誌は大正2年5月の39号をもって廃刊となり、信濃博物学会もこの年自然消滅している。背景に、動物学・植物学・鉱物学・地質学など、博物学を構成する各分野の研究が進展し、個々の学問領域として確立していったことも影響している。


⑯ 『史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯 長野県刊 1923(大正)12年 中央図書館蔵

1919年に史蹟名勝天然記念物法が公布されたが、長野県は1921年調査会を組織し調査を開始した。人文・自然科学に関する専門家を調査委員に委嘱した。自然科学の分野では矢澤米三郎をはじめ、河野齡蔵、八

木貞助、千野光茂、小泉秀雄などが最初の委員となった。大正 12 年には調査報告の第1輯が発行されたが、矢澤は「らいてう 雷鳥鶯」の項目を担当している。調査報告書は、1951 年の第 28 輯まで続いた。

⑰ 牧野富太郎はがき(矢澤米三郎宛) 矢澤家資料 1919(大正 7)年 諏訪市博物館蔵 

牧野が矢澤宛にタカネマンテマの標本を送るよう要望したハガキ。タカネマンテマは矢澤の教え子岡田邦松が発見した新種で、牧野は矢澤を通じて標本を入手しようとしたと思われる。このはがきの直後に牧野は岡田にハガキを送り、標本の借用を依頼している。文体は文語調。

⑱ 牧野富太郎書簡(矢澤米三郎宛) 矢澤家資料 1933(昭和)8年 諏訪市博物館蔵 

この書簡以前に矢澤から牧野に 4 点にわたる質問の書簡が送られていたらしく、一つひとつの質問に丁寧に答えている。文体は口語調。

⑲ 矢澤米三郎の主な著作


『帝国生理学提綱 全』1899 年 金港堂
『日本アルプス登山案内』1916 年 岩波書店 河野齡蔵と共著
『雷鳥』1929 年 岩波書店
『信濃天然記念物』1929 年 信濃郷土文化普及会
『日本アルプスの研究』1935 年 岩波書店

⑳ 河野齡蔵の主な著作

『高山植物の研究』1917 年 岩波書店
『高山研究』1927 年 岩波書店
『日本アルプス』1929 年 信濃郷土文化普及会
『日本高山植物図説』1931 年 朋文堂

<皇族登山と矢澤米三郎>

大正 10 年夏、朝香宮鳩彦王の立山縦走に際し案内役を務めた矢澤は、そのようすを手帳に記しています。ここからは矢澤の鋭い観察眼をみることができます。

㉑ 矢澤ノート 矢澤家資料 1921(大正 10)年 諏訪市博物館蔵 

大正 10～14 年頃の手帳。日本ノート学用品株式会社製。月日を記入する日記形式の書式だが、矢澤は記録用のフィールドノートとして使用している。内容は、女子師範で開催された専門家の記録や、登山に関わる記録や高山植物・動物の観察メモを含んでいる。特に大正10年7月末から8月初旬に行われた、朝香宮鳩彦王の登山に随行した際の記録は貴重である。

㉒ 祝儀袋 1921 年 8 月 7 日 諏訪市博物館蔵 

立山・剣縦走の案内に対し御礼の「酒肴料」として「金七拾圓」が「朝香宮殿下より」矢澤米三郎に渡されたことがわかる。8 月 7 日は全行程の最終日にあたる。

㉓ 『立山』吉沢庄作著 1925(大正 14)年 中央図書館蔵

富山県の教育者・博物学者・登山家・俳人でもあった吉沢庄作(1872～1956)が大正 14 年に出版した立山に関する総合的な案内書。総説・地形・特殊地形美＝名勝、地質、気象、動物、植物、鉱物、交通ほか人文・自然科学全般にわたって記述される。とりわけ、吉沢が皇族の立山登山の案内をした記録は貴重で、朝香宮の山行の詳しい記録も収録されている。

㉔ 『松本市史』上巻・下巻 1935(昭和)10 年 中央図書館蔵

明治 30 年代半ばの松本町時代から歴史編纂の計画が起こり、紆余曲折をへて上下 2 巻として完成した。下巻の行幸啓記事のなかには、朝香宮鳩彦王のアルプス登山に関する記録が含まれ、山行の復元の資料となっている。

②⑤ 『山の写真のうつし方』 手塚順一郎著 1932(昭和7)年 個人蔵

手塚順一郎(1884~1932)は、大町に生まれた山岳写真家。本書は日本初の本格的な山岳写真の手引書である。大正9年、10年の朝香宮鳩彦王の槍・穂高、立山・剣の山行に同行し、写真撮影を担当していて、その時の写真が現在まで伝えられている。

おわりに

<博物学の時代—登山・写生・写真・博物・教育が複合した時代—>

信州における自然科学的な調査研究、すなわち博物学は、おもに長野県師範学校の教員や卒業生らによって明治20年代にはじめられました。初期の研究者に渡辺敏、羽田貞義、矢澤米三郎、河野齡蔵らがおり、研究団体として信濃博物学会が1902(明治35)年に結成され、研究雑誌『信濃博物学雑誌』が研究活動を支えました。信州における主な研究者は師範学校の教員や卒業生、中学校の教員などであり、その中心人物が矢澤米三郎でした。動植物、鉱物など現実に存在するあらゆる自然物を対象とした博物学を支えたのは、近世本草学以来の写生技術であり、近代登山の発展とともに山岳地の動植物にもフィールドを求め、写真技術の進展を伴いながら、大正から昭和にかけ生物学、地質学などの学問に発展していきました。こうした学問的発展は、大正期にはじまる名勝・天然記念物の調査報告にも結実しています。

②⑥ 信濃植物誌—1983— 横内齋著 1983年 銀河書房

青年時代に矢澤米三郎・河野齡蔵の指導を受け、その後長野県内の植物を70年間にわたり調査、新種の発見や県内産地の確認などで成果を上げた。本書は没後、残された4000枚の原稿をもとに、子息の手で出版されたもの。元になった標本約25000点は信州大学に寄贈され、現在自然科学館の所蔵となっている。

②⑦ 長野県植物誌(清水建美監修) 長野県植物誌編纂委員会編著 1997年 信濃毎日新聞社

1978年から編纂を開始し1997年に完成した1700頁を超える植物誌。長野県内で確認できた植物のデータ40万件を収める。

<現代へ、そして未来へ引き継ぐもの—信州大学ミュージアムへ>

ライチョウや高山植物などの生物標本と矢澤米三郎をテーマに取り上げた今回の企画展。100年前の貴重なライチョウ標本が本学の自然科学館にあることを知り、それがどのような経緯で伝えられるに至ったのか、その調査から作業は始まりました。1936(昭和11)年に長野県松本女子師範学校が作成した『郷土研究資料目録』がその大切な手掛かりとなり、自然科学館に伝来したライチョウ標本に関しては、矢澤米三郎が採集した標本そのものであることが理解されるに至ったのです。自然資料標本とその伝来を物語る人文資料の両者が相まって標本の学問的価値を高めたと言えます。特に、地球環境における気候変動を考えるうえで高山生態系はとても脆弱であるとともに鋭敏なセンサーでもあります。その意味で、100年以上前の動植物標本を活用した他に類のない文理融合型研究は、重要な位置にあります。過去の高山生態系を理解し、そして過去から現在までの変遷を理解することは、将来予測や保全策の検討においてもとても重要なことです。そして、標本等の試料・資料は過去を知るための唯一の手段なのです。ここに異分野の協力を基礎に研究することができる大学ミュージアムの存在意義があり、研究基盤としての信州大学ミュージアムを展望します。

②⑧ 長野県版レッドリスト 植物編 2014年 長野県環境自然保護課・長野県環境保全研究所編著

絶滅のおそれのある長野県の野生生物のうち、植物についてリスト化したもの。2002年~2005年に発行されたレッドデータブックを改定したもの。

②⑨ 長野県版レッドリスト 動物編 2015年 長野県環境自然保護課・長野県環境保全研究所編著

絶滅のおそれのある長野県の野生生物のうち、動物についてリスト化したもの。2002年~2005年に発行されたレッドデータブックを改定したもの。

(文責:福島正樹)